法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-05

# まち、或いは母 ： 京都岩倉の地域看護から考える

内山, 媛理 / UCHIYAMA, Himeri

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院デザイン工学研究科
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of graduate studies. Art and Technology / 法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2023-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030188

# まち、或いは母
# 京都岩倉の地域看護から考える

CITY OR MOTHER
Think from IWAKURA of Kyoto

内山媛理
Himeri UCHIYAMA
主査　赤松佳珠子

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

Increasing numbers of withdrawn adolescents. Is it only the unstable thing of a person or a hospital room that can save them from the cycle of loneliness? Using community nursing in Iwakura, Kyoto as a model case, we seek community nursing in the modern age and a place to be a mother.

***Key Words*** *: psychiatry, IWAKURA, temple,home,mother*

## １．母を失ったわたしたち

(1)　引きこもるわたし

現代には、うつ病に悩まされる人がたくさんいる。そして、かく言うわたしも、ある日突然家から出られなくなる日がくるかもしれない。本研究では、現代の時間軸に適応できなくなった独り身の人たちに焦点を当てながら、「救う人 / 救われる人」という従来の福祉の形ではなく、「私たちが共に在る」という新しい福祉の形を目指していく。

(2)　日本の精神医療

かつての日本の精神医療は、神社仏閣、宿屋などの自然・社会環境と治療・看護行為とが密接に結びついていた「場所」で行われていたが、近代精神医療は私宅監置室 や病院・施設などの、家族関係や地域社会から閉ざされ、切り離された均質な「空間」で行われている。精神医療は今一度、「場所」を目指すべきだ。

3)　場所を目指して

家から出れなくなった時、人に会わなくなる、会えなくなる、症状が悪化するというサイクルに陥る。この時、「家族」という内にある外的要因は孤独のサイクルから抜け出すきっかけとなり得る。では、家族のない人たちは孤独であるしかないのか。ジェンダー的役割によって定められた、「家」は解体されるべき時に来ている。まちの家族関係とその土地の豊かな表情が身体に結びついた時、私たちはまちに母を求められるようになるのではないか。精神病治療だけに止まらない、人間の本能的な母となる「場所」を考えていく。

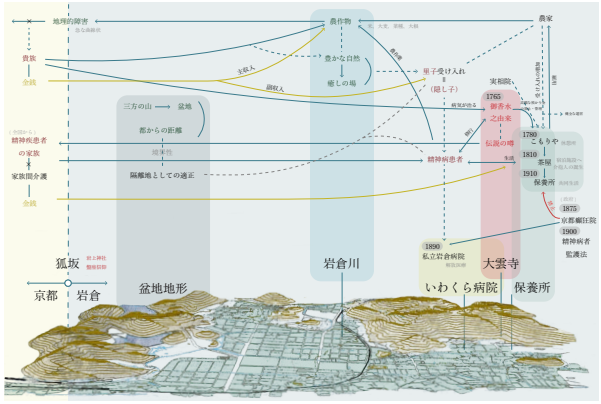
## ２．京都岩倉の地域看護

(1)　京都岩倉のネットワーク分析

京都岩倉は、その豊かな地形と岩倉川によって農作が盛んな地である。当時、狐坂の影響で都まで農作物を出荷するのが困難だったため、貴族が羽伸ばしとして岩倉の農作物を楽しみにきていた。やがて、岩倉の大雲寺で脳病が治ると噂が流れる。大雲寺を訪れる人が増えると、居場所が必要となる。周囲の農家は自主的に「こもりや」という休憩所を始めた。

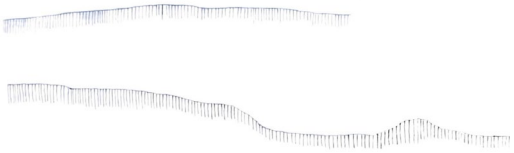
「こもりや」はやがて介抱人のいる宿泊施設「茶屋」になり、家族は安心して精神病患者を岩倉にひとりで預けられるようになった。最終的に下宿場は「保養所」と名前を変え、多くの精神病患者を預かり、共同生活を過ごした。

この預かりによる家族看護は決して善意だけで成り立っていたわけではなかった。農作という不安定な収入源に頼っていた農家に、宿業という安定した収入ができ、農業に就くことができない人にも新しい仕事が与えられたのだ。




▲岩倉 ANW 図

(2)　京都岩倉の地形的分析



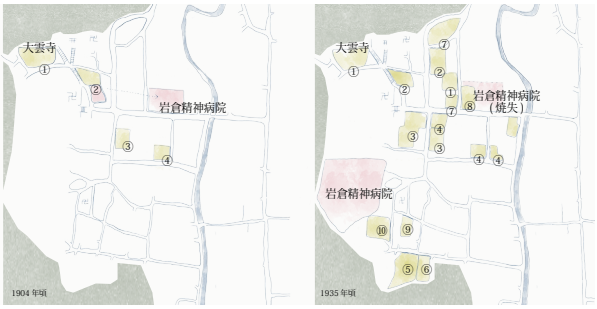
【図上：狐坂】

岩倉への入り口に位置し、急な坂道のため馬の通行が困難だった。みやこ (京都) と岩倉の境界であり、風景が変わるきっかけでもある。

【図下：岩倉盆地】

三方を山に囲まれている。地形的に守られた空間の中で、人々は病気治療の修行に励んでいた。

(3)　保養所の分析




大雲寺参道沿いに保養所が生まれ、岩倉病院を中心に円状に保養所が広がっていった。

保養所内部空間は共用、家主の部屋、療養部屋、中庭から構成されている。保養所はそれぞれ外壁で囲われ、分断されており、家同士の繋がりはなかった。

▲城守保養所平面図

## 3．岩倉的看護を実現させるには - 敷地選定 -

(1)　岩倉において家族的看護を可能にしたもの

中山治氏が述べた「岩倉において家族的看護を可能にした 10 箇条」に【歴史性】【境界性】【地形性】【影響性】の建築的視点を追加。

精神病治療に由縁のある全国の 6 つの寺（高尾山薬王寺 / 中山法華経寺 / 龍福寺 / 室田不動・瀧澤不動 / 大岩山日石 / 寺慈光寺）を調査した。

(2)　市川中山の可能性

市川中山は東京と千葉の境である、江戸川沿いに位置し、東京との境界性を持つ。また、中山法華経寺が位置する台地の麓に、精神病院の中山病院が存在する。医療法の制定と共に寺での治療修行が禁止され、中山に集まった患者を受け入れるため、精神病院が作られたのだ。

市川中山は京都岩倉と同じ文脈で作られた土地であり、精神病治療が地域に根付いている。岩倉的地域看護を実現させるポテンシャルが十分にあると言える。

## 4．設計アプローチ

(1)　地形的アプローチ

まず、千葉県の台地に位置する中山に、京都岩倉の盆地性を見出せる敷地を探すところから始まった。中山法華経寺の地形を見てみると、一箇所だけ谷地になっている場所がある。谷地は法華経寺に沿うように存在しており、住宅地が広がっている。この場所の母性に着目し、その谷地に続く一本の坂を岩倉の狐坂のようなランドスケープの境界 / 起点として見る。

(2)　ネットワークアプローチ

京都岩倉には大雲寺と保養所を中心としたネットワークが存在し、そのシステムを強固なものとしていた。

市川中山は住宅街であるが、少し離れたところでは農作が行われている。今回、住宅群と法華経寺を繋ぐ

一次産業として着目したのが花き産業だ。豊かな土地で生産した仏花を法華経寺の祭りや墓参りと結びつけていく。

(3)　寺 - 家

日本の寺院はまちに対してボイドを持つ。空間としてみればボイドであるが、参道という強い方向性を持つ道が複数存在することを考慮し、対象敷地を「面、線、点」としてそれぞれ調査した。

【面 / ボイド】

寺院はボイドを生み出し、人々の居場所を作り出している。中山は「寺ボイド」「病院ボイド」「住宅コロニー」に分けることができ、それらは地形的に分断されている。

【線 / 道】

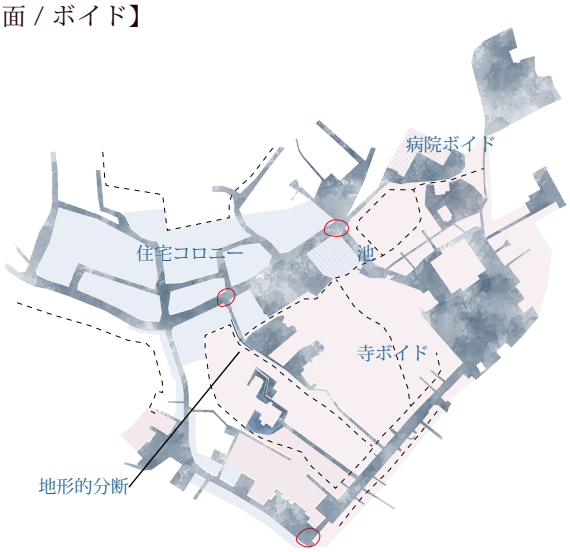
ボイドとなっている空間にも強い方向性があり、それこそが参道の持つ力である。「寺ボイド」と「住宅コロニー」を繋ぐのは一本の坂道だが、
裏道のように寺ボイドに接続する道がいくつか存在する。

【点 / 建物】

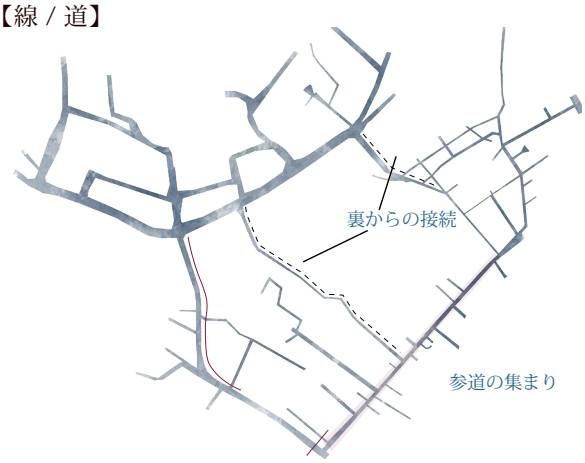
台地にはたくさんの寺が集まり、それに回り込むように、谷地に住宅が粒としてある。

これらに対し、住宅群に寺院特有のボイド、奥性のある小道を挿入し、まちの余白を作り出すと共に、建物同士をプログラムで繋いでいく。

【面 / ボイド】




【線 / 道】




【点 / 建物】

## ４．設計

### (1)　へや - いえ - まち

中山の地形と呼応しながら、内なる場所を作り出すと共に、外の世界と接続する「境界」を設計していく。

それらの操作を へや - いえ - まちの３つのスケールで行うことで、いえが、へやが、まちが、それぞれの身体スケールを持ちながら私たちの身体の中に刻まれるようになる。

### (2)　「へや」

へやは最も身体に等しい場所である。例えば、うつ病の症状が激しい日は、1 日を寝たままで過ごす事になる。だらりと寝転がった視線の先に見えるもの、床こそが最も私たちの身体となるべき場所である。

緩やかな傾斜を持った床スラブは私たちの身体に寄り添い、広がる地形と呼応して谷を作る。そうして作られた場所は、うつ病でないあなたの身体にも寄り添い、母となる。

### (3)　「いえ」

【ふたつの動線】

家にそれぞれ与えられた「仕事」の輪を繋ぐように、産業の動線を巡らす。

また、そのひとつ後ろに生活動線を引く。ふたつの輪は縦の線で交わり、生活の境界に選択肢を与える。

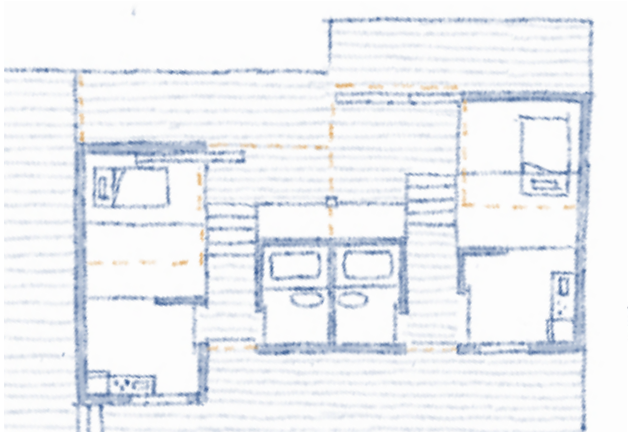
【家としての単位】

家としての意識を守るため、1 住戸あたりの住人は 4~6 人とする。住まい手は、うつ病などの成人など。それぞれは個人のまま、場所としての家族を紡ぐ。

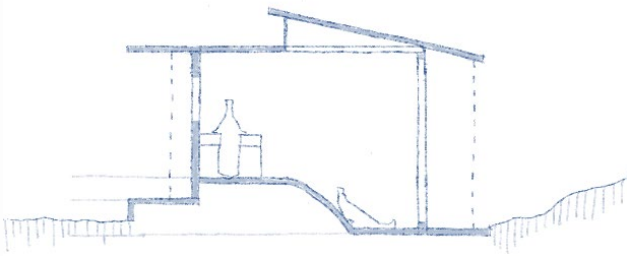
【家守の存在と境界】

家の精神的中心として家守の部屋を設ける。家守の部屋の位置は産業動線と生活動線を繋ぐ位置とし、全ての部屋が見渡せる位置に設ける。

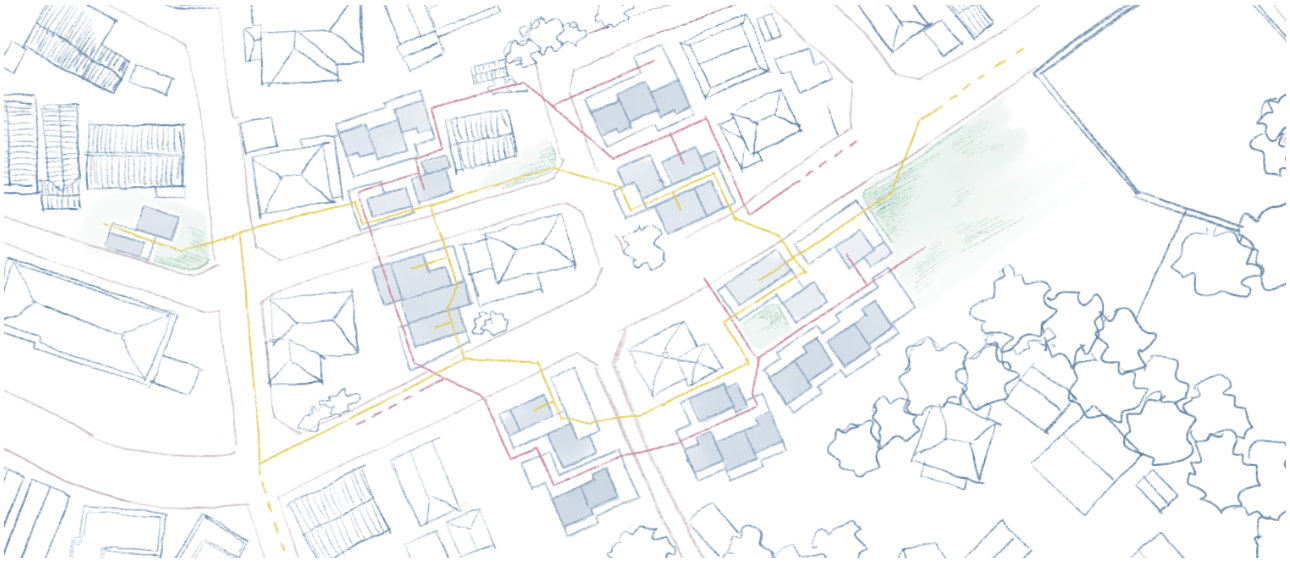
また、家守のへやの一階部分は周囲と一体となって広場になる。



▲「へや」　平面図



▲「へや」　断面図



▲「いえ」　平面動線図 ( 黄色 : 産業動線 ピンク : 生活動線 )

▲「いえ」　平面図

(3)　「まち」

法華経寺参道と裏の住宅を繋ぐ坂をこの場所の境界とし、起点の建物を設ける。私たちのいえ、そして身体の範囲は円環状に広がっていき、まちを歩くことで自分の居場所を見つけていく。

そして、その経験こそが、場所に愛着と故郷を見出す、母なる体験であるのだ。

▲坂道コア

▲「まち」

5、謝辞

はじめに、今は遠いところへ行ってしまった葵ちゃんの名前をここに遺します。

修士設計を行うにあたり、ご指導頂いた赤松佳珠子教授に深く御礼申し上げます。また、デザインスタジオ 11 でお世話になりました小野田泰明先生、副指導としてご指導いただいた高村雅彦教授、小堀哲夫教授をはじめ、ご指導いただきました全ての先生方に感謝申し上げます。また、支えてくれた家族、共に議論したゼミの仲間、今もまだ病に苦しむ友人たち、全ての仲間に感謝すると共に、皆の未来が少しでも安らかであることを祈ります。

---

参考文献

中村治「洛北岩倉と精神医療―精神病患者家族的看護の伝統の形成と消失 」世界思想社、2013 年
橋本明「治療の場所と精神医療史 」日本評論社、2010 年
中村治・青木純「癒しの里・洛北岩倉」岩倉の歴史と文化を学ぶ会、2000 年